津軽漆連の立ち上げと2021年の活動

The Tsugaru Urushi Contact's Activity Report for 2021

髙　橋　憲　人※・木　村　崇　宏※※

Ⅰ．津軽漆連の概要

2021年、津軽塗の産地振興を目的とした任意団体「津軽漆連」が発足した。発足の経緯は、髙橋とギャラリーCASAICO代表の葛西彩子が、「消費者が津軽塗を見たり、津軽塗についての情報にアクセスしたりしたくても、津軽塗の全体像を俯瞰できるような場所やポータルサイトが存在しない」「津軽塗の定義が複雑・曖昧であり、消費者に伝わり難い」「津軽塗の近現代史が整理されていない」「2000年代以降の後継者育成事業出身の若手職人の交流・情報共有の場が存在しない」等の産地の問題を、若手職人たちと協議していく組織が必要であると思い立ったことに始まる。2021年１月に何人かの若手職人を交えて意見交換をおこなったところ、津軽塗業界の青年部のような団体を立ち上げるという方向で話がまとまった。そこで、行政側の若手人材にも協力を仰ごうと、地方公設試験研究機関である青森県産業技術センター弘前工業研究所デザイン推進室の鳴海藍に声をかけ、以後この３人が中心となり月例会をおこなっている。

2021年12月現在の会員は、髙橋（代表）、葛西、鳴海の他、大学研究者２名（近藤史（弘前大学人文社会科学部）、譚謙（湖北恩施学院））、津軽塗の若手職人８名（大瀬歩、天野琴音、北畠栄理子、今立、島守宏和、原純司、増川泰治、三上優司）、津軽塗後継者育成研修事業研修生１名（木村崇宏）、津軽塗技術保存会木地研修生２名（木田明子、成田ひろみ）、津軽塗製造会社社長２名（小林正知（小林漆器）、田中寿紀（たなか銘産））の他、北畠とコラボし津軽塗のパーツを嵌めたシルバーアクセサリーを制作してる銀細工職人（木村祐介（BLUE HAWK））、元津軽塗職人（赤城宏平）の20名である。その他にライターの世良啓氏、プランナー兼デザイナーの高野明子氏が協力をしてくれている。

2021年は、以下の日程で月例会が開催された。

2021年２月４日	18：30～	参加者５名
2021年３月27日	18：00～	参加者12名（内zoom参加２名）
2021年４月26日	18：00～	参加者10名（内zoom参加１名）
2021年６月１日	10：00～	参加者11名（内zoom参加３名）
2021年７月６日	10：00～	参加者10名
2021年８月10日	10：00～	参加者11名
2021年11月30日	10：00～	参加者15名（内zoom参加２名）

※　Kento Takahashi　　弘前大学大学院地域社会研究科　客員研究員
※※ Takahiro Kimura　　津軽塗後継者育成研修事業　研修生

Ⅱ．藤田清正氏の手板整理

2021年の主要実績は、会員の津軽塗職人を中心に行った、青森県工業試験場（現・青森県産業技術センター弘前工業研究所）の技官であった藤田清正氏（1921–2005）が残した手板（ていた：手のひらサイズの板に塗りを施した技法と模様を伝える標本資料）605枚の整理事業である。

2021年は藤田氏の生誕100周年に当たる。そこで、藤田氏の子息で弘前市在住の漆芸家、藤田正堂氏から、ギャラリーCASAICOでの記念展示会を開催したいとの提案があった。正堂氏は、髙橋、葛西とは旧知であり、過去にもギャラリーCASAICOでは、藤田正堂展「うるしの器―父清正とともに」(2011)、「藤田正堂と香川の漆工芸」(2016)、藤田正堂「60の仕事―慶び―」(2018）を開催した実績があった。そこで、「gallery10周年特別展 生誕100年記念 藤田清正 漆芸展―漆液に魅せられて」が2021年10月２日～10月11日の日程で開催される運びとなり、その際に藤田氏が残した漆芸作品とともに、青森県工業試験場の技官として製作した津軽塗の手板605枚も併せて展示されることとなった。手板は、様々なパターンの唐塗の他、ひねり塗、たたき塗、転がし塗、櫛目塗、たばこ塗、松葉塗、青海波塗、ろうけつ塗、シルクスクリーンを用いたななこ塗、箔貼りの紋紗塗などのものがあり、後世の職人たちが技法の多様性を学ぶ資料としても貴重なものである。2020年に「若い世代のために使って欲しい」との正堂氏の意向から葛西が預り、ギャラリーCASAICOで保管されていた。過去には2008年に弘前市立百石町展示館で開催された「藤田清正回顧展」で展示されたことがあるものの、藤田氏手作りの木製パネルに両面テープで張り付けてあり、並びもバラバラで技法ごとに整理されていない状態にあった。そこで、この機会に手板の整理・分類作業をしたいとの要望が正堂氏から葛西にあった。

８月10日の津軽漆連月例会の際に葛西から、この整理・分類作業を津軽漆連の会員で行ってはどうかという提案がなされた。この提案は可決され、最終的に手板１枚１枚の両面テープを剥がしてマグネットシートを張り、新たに展示用の鉄製パネルを誂えることが決まった。これにより、手板の並びを自由に変えることができ、展示時以外は手板を外して保管することが可能となった。鉄製パネルは正堂氏が地元の鉄工所に60×90㎝のものを９枚、60×45cmのものを３枚発注した。手板を元の木製パネルから剥がす前の仮ナンバリング作業を弘前工業研究所の鳴海が、木製パネルからの手板剥がし→両面テープ剥がし→分類とナンバリング→スキャン→マグネットシートの貼り付け→鉄製パネルへの並べ直し→展示という一連の作業を葛西と若手職人たちが担当することとなった。以下では、木村の記録より一連の作業プロセスを紹介する。

2.1　手板剥がし

（１日目）
日　時：2021年８月29日（日）15:00～19:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、成田、原
　　助っ人（正堂氏、正堂氏の配偶者、世良氏、浅瀬石悟氏）

先ずは仮ナンバリングのため、手板を外す前に木製パネル毎の写真を撮影した。写真データは鳴海に送られ、この写真データ上に仮の通し番号が振られた。つぎに、金箆を使って手板を台座から剥がしていった。作業は唐塗系の手板から始められた。金箆を手板と木製パネルのあいだに入れてごしごし剥がしていく。しっかりとくっついていたが、案外簡単に取れた。ここで接着剤が両面テープであることが分かった。

全ての手板を木製パネルから剥がし終えると、手板の裏面に張り付いた両面テープを剥がす作業に移行した。最初は灯油を使ってみたが、途中から剥離剤を使うことにした（写真２)。灯油も剥離剤

もケチらずにたっぷりとつけ、少し時間を置くのがいいようだった。木製パネルから剥がす作業に比べて時間がかかったが、人海戦術でなんとかやりきった。途中から正堂氏夫妻が合流した。両面テープを剥がし終えた手板は、灯油、剥離剤を拭き取り、アルコールで拭き清めた。その後、「唐塗」、「唐塗×櫛目塗」、「たたき塗」、「ひねり塗」等大まかな分類をし、大きな机の上に並べた。

写真1　両面テープ剥がし

試しに拭き清めた手板裏面の四隅にマグネットシート貼り、マグネットボードに貼り付けてみたところ十分な強度があったので、「これでいいのでは」という話になった。

（2日目）
日　時：2021年8月30日（月）17:00～21:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：赤城、大瀬、葛西、北畠、木村、今、原
　　助っ人（正堂氏）

1日目に引き続き、「ななこ塗」とそれ以外の手板の両面テープ剥がし、拭き清めをおこなった。1日目で慣れて作業の要領を掴んだと思っていたが、なぜか1日目ほどには思うように進まなかった。1日目は、作業に夢中で手板の表面に少し傷がつくことがあったため、この日は傷をつけないように丁寧に作業をおこなったことが要因かもしれない。

（3日目）
日　時：2021年8月31日（火）17:00～21:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、原
　　助っ人（正堂氏）

2日目に終わらなかった「ななこ塗」と、それ以外の手板の両面テープ剥がしを引き続きおこなった。なんとか全部の手板を終えることができた。全ての手板の両面テープを剥がし終え、拭き清めた後、また簡単に大まかな分類をおこなった（唐塗、唐塗×櫛目塗、櫛目塗、たたき塗、ひねり塗、転がし塗、ななこ塗、紋紗塗、ろうけつ塗、青海波塗、彫漆、蒟醤など）。

最後に、手板を新しい鉄製パネルに貼り付ける方法を話し合った。その結果、手板裏面にマグネットシート（1辺2cmくらい）を貼り、鉄製パネルに貼り付けるという結論に至った。市販のマグネッ

トシートの強度等を検討してみたところ、小さい正方形の手板（以下、小手板）にも大きい長方形の手板（以下、大手板）にも、4隅に4つのマグネットシートを貼り、もし強度が不足しそうな場合はさらに真ん中にマグネットシートを足すことになった。

2.2　分類とスキャン

（1日目）
日　時：2021年9月3日（金）18:00～21:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、原
　　助っ人（正堂氏、世良氏）

「手板剥がし」の作業を終えた手板を、技法ごとに分類し、家庭用の複合プリンタでスキャンした。

まず、小手板を、女性チームは「唐塗」、男性チームは「ななこ塗」から始めた。今回用いた複合プリンタは、小手板だと隙間なく並べて6枚同時にスキャンできた（写真2）。男性チームは分かりやすい「ななこ塗」の「微粒面」から始めたが、その27枚をどのようなやり方、順序で並べていくのが適切なのか議論になった。そこから、分類そのものの妥当性や全体としての統一性、デジタル情報としての識別や整理のしやすさなどを、藤田氏を交えて話し合ったが、かなり悩んだ。

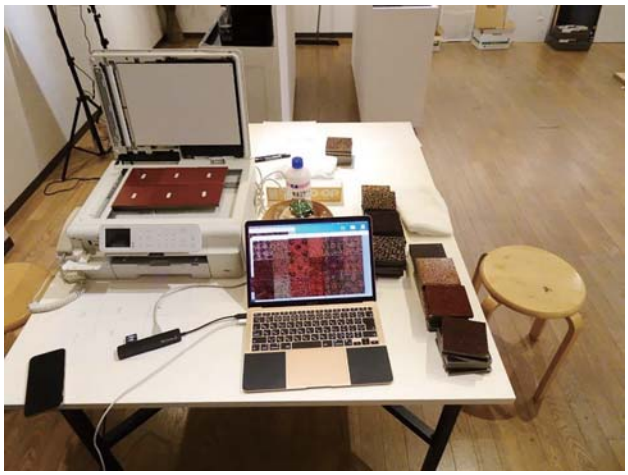

写真2　スキャン

話し合いの結果、それぞれの手板をたとえば「N1-2」という表記で分類し、識別番号を振ることにした。

- 「N-　」←大分類

　先頭のアルファベットは最も大きな分類／カテゴリーを表す。たとえば「唐塗」「ななこ塗」「櫛目塗」「蒟醤」などをローマ字表記した際の頭文字を取っている。

K：唐塗
H：ひねり塗
KS：櫛目塗（KuSime）
N：ななこ塗
KN：蒟醤（KiNma）

•「1- 」←小分類

次の〝1〟はその下位の分類／カテゴリーを表す。例えばN:「ななこ塗」の場合、「N1- 」の〝1〟は「微粒面」の小分類、「N2- 」の〝2〟は「無地」の小分類を指す。「ななこ塗」には8つの小分類を設けた。

N1-：微粒面
N2-：無地
N3-：紗上げ
N4-：ぼかし
N5-：彩色
N6-：網目彩色
N7-：箔押し
N8-：その他

ただし、この小分類における表記の数字と内容は、それぞれの大分類において任意のものとする。

•「 -2」←個別番号

末尾の数字〝2〟は、小分類中の個別番号である。たとえば「N1-：ななこ塗・微粒面」は全部で27枚の手板があったので、それぞれ〝01〟～〝27〟の番号が割り振られている。つまり「N1-01」～「N1-27」までの手板がある。個別番号の割り振り方は、大まかな方向性として上げの色（最後に塗る地の色）の順番でナンバリングしていった。数字の若い方から、上げの色が「青→紫→赤→茶→黄→緑→白／黒」という順番になるようにした。「N1- ：ななこ塗・微粒面」の場合は、「N1-01」は青の、「N1-27」は白の上げになっている。

しかし、なかには枚数や種類が少なく、小分類がないものもある。例えば「KN：蒟醤」は、小手板だと10枚しかなく、またそのなかでさらに細かく分類する必要性があるものもなかった。このような場合、小分類の数字は与えず、大分類〝KN〟のあとにすぐ個別番号を振ることにした。「蒟醤」の場合、「KN-01」「KN-02」といった具合である。この日は、「ななこ塗」、「蒟醤」、「唐塗」の大部分をスキャンすることができた。

（2日目）
日　時：2021年9月4日（土）18:00～21:30
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、原
　　助っ人（正堂氏）

作業開始前に、津軽漆連のグループLINEでも提起された大手板の大分類の表記法や、「櫛目（刷毛目）塗」「ひねり塗」「たたき塗」等の分類方法を改めて議論し、その後、1日目の作業の続きを行った。はじめに、大手板の大分類の表記法については、様々な意見があげられたが、小手板の大分類のアルファベットの後ろにlargeを表す〝L〟をつけることになった。たとえば大手板の「ななこ塗」の「ぼかし」の1枚目は「NL4-01」という表記になる。

つぎに「櫛目（刷毛目）塗」「ひねり塗」「たたき塗」は唐塗と併用されていたり、複合的に用いられていたりするものが多く、どのような分類が妥当なのか問題になった。手板の数の多さや複合技法のバリエーションを考慮すると、唐塗と併用されているものは「唐塗」を優先し、大分類「K」に分類することにした。また、これ以外の複合技法では「櫛目塗」を優先することにした。櫛目塗に「ひねり」や「たたき」が入っているものは、大分類は「櫛目 KS」とし、「ひねり」や「叩き」を小分類とした。「ひねり塗」「たたき塗」単独のものは、それぞれの大分類として識別した。

KS：櫛目塗　KS1-：櫛目
　　KS2-：櫛目＆ひねり
　　KS3-：櫛目＆たたき
H：ひねり塗
T：たたき塗

分類や表記法が定まったところで、前日の作業の続きに入った。「たたき塗」、「ろうけつ塗」、「櫛目塗」、「転がし（ローラー）塗」、「蒔きもの」、「布目」、「その他」などの残った小手板のスキャンを終えることができたが、想定していたよりもかなり時間がかかってしまった。以下が、手板の大分類一覧である。

K：唐塗
T：たたき塗
H：ひねり塗
KR：転がし塗（KoRogasi）
KS：櫛目塗（KuSime）
N：ななこ塗
NS：錦塗（NiSiki）
SS：笹の葉紋（SaSanohamon）
M：蒔きもの
W：青海波塗（Wave）
R：ろうけつ塗
CH：彫漆
KN：蒟醤（KiNma）
KP：金箔（KinPaku）
C：布目塗（Cloth）
O：その他（Others）

「M:蒔きもの」の分類作業中、蒔いてあるものが何なのか意見が定まらず、議論が白熱した。ぱっと見、蒔いてあるものは白っぽく見えるのだが、それが乾漆粉のか、金属粉なのか、卵殻なのか、また金属粉の場合何の金属なのか、また粉の形状は平目粉なのか丸粉なのか。正堂氏や先輩の職人たちが様々な角度から推測しているのを見聞きして勉強になった。小手板の作業を終えた時には大分遅い時間になっていたので、大手板は少しだけスキャンしてこの日に作業を終えた。大手板は、以下の分類になる。

KRL：L 転がし塗（ローラー）
KSL：L 櫛目塗
NSL：L 錦塗

大手板は一度に4枚スキャンすることができた。画像のナンバリングの順序は小手板と同様である。

（3 日目）
日　時：2021年 9 月 5 日（日）15:00～18:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、成田、原
　　助っ人（正堂氏、正堂氏の配偶者）

男性チームは、2 日目に残した大手板のスキャン作業を続け、女性チームと正堂氏夫妻はスキャン済みの手板の裏にマグネットシールを貼る作業に移行した（写真 3）。木村は、スキャン作業をしながら、分類ごとの手板の枚数を整理し表にまとめた。その結果、手板の総数は605枚（小手板：484枚、大手板：121枚）であることが分かった。男性チームもスキャン作業が終わり次第、マグネットシール貼りに合流した。マグネットシールは、四隅ギリギリに貼るのではなく、少し内側に貼ることになった。マグネットシールを貼った手板は、そのまま重ねると表面に傷がついてしまう恐れがあったため、薄葉紙を切って手板同士のあいだに挟み、箱に立てて収納した。

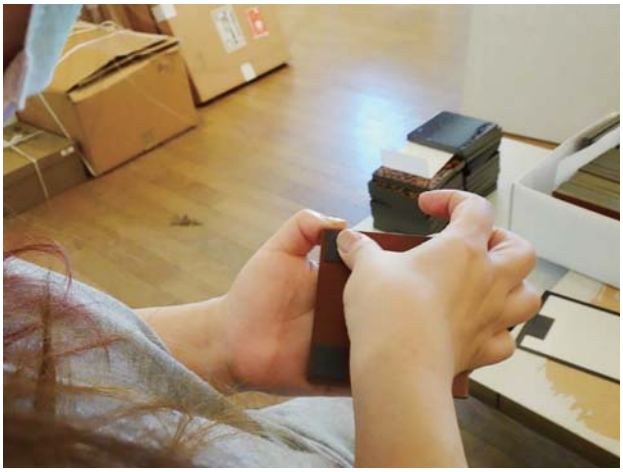

写真 3　マグネット貼り

2.3　鉄製パネルへの並べ直しと展示

（1 日目）
日　時：2021年 9 月29日（水）14:00～19:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、原
　　助っ人（正堂氏）

鉄製パネルが納品され、パネルを壁に掛けるためのビス打ちと、手板を選択し、パネルに貼り付ける作業とを同時進行でおこなった。パネルは、発注時に想定していたものの約 2 倍の重さがあったため、落とさないように細心の注意を払いながら作業する必要があった。まずはパネルを壁に貼る高さを決めた。高さが決まったら、水平器（レーザーレベル）とメジャーを使ってビスの位置を決め、ペンで印をつける。ビスの位置が決定したら、フックを固定しながらビスを打ち込んでいった。

最初にビスを打っていた唐塗用のパネルから、手板を選んで貼り付けた。手板同士の間隔は、上下左右ともに同じになるようにした。小手板（正方形）の 1 辺は 9cm弱なので、手板の間隔を2.5cmにして、大パネル（60 × 90cm）に横 5 枚、縦 7 枚の計35枚貼ることになる。大手板（長方形）は 2cmの間隔にして横 5 枚、縦 5 枚の計25枚にした（写真 4）。

手板の選択方法は、まず当該パネルに対応する分類の手板を全て出してから、余った枚数を除外し

ていった。たとえば、「唐塗」の「ベーシック」（K1）は大パネル２枚分（小手板70枚）貼れるが総数は80枚であったため、実施者全員で相談し10枚を除外していった。選択の基本方針としては、似ているものを外していき、それでも多い場合は、色味が地味すぎないもの、実施者たちの好みのものを選んだ。手板同士の配置は、全てのパネルに共通したルールは設けなかったが、色のグラデーションや模様の系統に統一感を持たせて配置した（写真５）。手板を貼り終えたパネルを、ビスを打った壁に掛ける際には、貼り付けた手板がずれないように、手袋をして手脂がつかないように注意しながら、２人がかりで設置した。

写真４　鉄製パネルへの並べ直し

写真５　並べられた手板

（２日目）
日　時：2021年９月30日（木）14:00～19:00
場　所：ギャラリーCASAICO
実施者：大瀬、葛西、北畠、木村、今、原
　　助っ人（正堂氏）

前日の作業の続きをおこなった。大手板の「笹の葉紋」をはじめ、彫漆、蒟醤、蒔きものなどを鉄製パネルに並べなおした。

Ⅲ．藤田清正 漆芸展―漆液に魅せられて

「gallery10周年特別展 生誕100年記念 藤田清正 漆芸展―漆液に魅せられて」において、手板の整理、展示作業以外では、髙橋が展示会場用に「オルタナティブとしての『変わり塗』」「藤田清正と讃岐系漆芸」「『手板』とは何か」の３つの文章を寄稿し、協力者の世良氏が、藤田氏の略歴と藤田氏存命中の津軽塗業界の年譜をまとめた。このプロセスで、津軽塗の近現代史について散在する資料を読み込み、議論を重ねることで、今後の近現代史整理作業に繋がると思われる発見を得たりもした。

また若手職人たちが技法ごとに手板を並べ直してくれたそれぞれのパネルには、髙橋の発案による津軽塗諸技法の新たな分類表（図１）を用いて、鳴海が作成したキャプションが付けられた。従来の津軽塗諸技法の説明は、経済産業大臣指定伝統的工芸品に登録された「唐塗」「ななこ塗」「錦塗」「紋紗塗」の４技法を示した後に、「実は他にも沢山のバリエーションがあるんですよ」というお決まりの流れを採る場合がほとんどである。しかし、津軽塗の多様性を分かりやすく消費者に伝えるためには、たまたま産業化のレールに乗った主要４技法も、マイナーなその他の技法も一度フラットに戻したうえで、模様を出す作業工程の違いから説明をした方が効果的であると考えられる。新たな分類表は、このような意図から考案された。

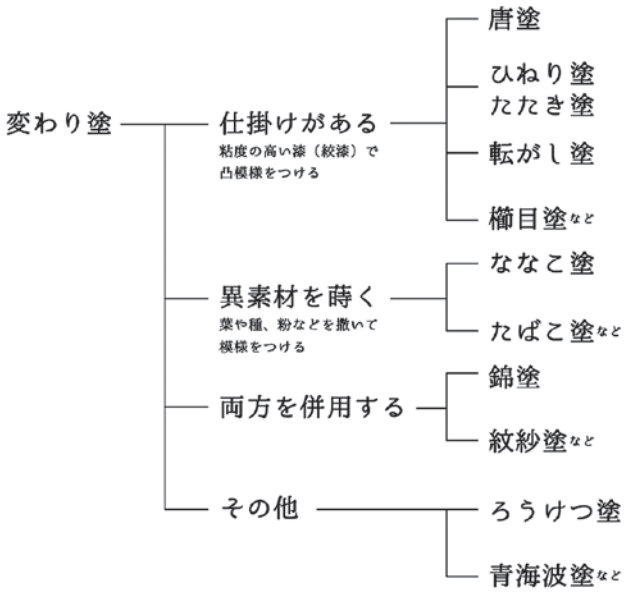

図１　津軽塗諸技法の新たな分類表

今後の津軽漆連の活動としては、熟練の津軽塗職人、津軽塗の周辺技術者（指物木地屋等）、その他関係者への聞き取り、青森県工業試験場の元職員等が所持している近現代の津軽塗業界の資料収集を進め津軽塗近現代史のアーカイブ化を行っていく。奇しくも青森県工業試験場（現・青森県産業技術センター弘前工業研究所）は、翌2022年に創立100周年を迎え、弘前工業研究所でも100年史編纂のため過去の津軽塗関係の実績のアーカイブ化作業を行っているところである。これらの成果を踏まえ津軽漆連は、2022年中に津軽塗のポータルサイト開設と一般公開を目指している。